

ぼろしり

8月11日「ECSB」

今年の「山の日」天候が心配されたが、何とか持ちこたえた。参加者14名(参加者平均年齢61.8歳)、のぞみコミセンを3台の車に分乗して出発。森林管理署に許可を得て樽前山南山麓



に走る林道の標高360m付近まで入る。そこから約1時間弱、標高650m付近に地震装置電源のソーラーパネルが設置されているところで一息。湧き

出る美味しい水に鋭気をもらおう。そこから西ピークまで一気の登り。登る途中、霧が掛かって山を覆ったが、頂が近づくると霧も晴れ、西ピークやドームが姿を現した。全員揃って頂に立ち「山の日」を祝った。こ



の日の登山を道岳連に報告。全道の「山の日」の記録が後日まとめられる。参加した団体の参加者に「缶バッジ」が贈られた。詳細は例会で。

《7月例会山行「沢研修」三重の沢》

7月30日、昨年に引き続き白老の沢で沢迦行研修行われた。今回は、駐車場に戻ってくる一回りコース。



心配されていた天気も最高の沢日和。まずは白老川本流に作業道を利用しており、柱状節理に囲ま

れた白老の滝を見学。その後、三重の沢出合まで美しい川床の中をへつったり、川中を漕いだりしながら各自自由迦行で白老川を下る。三重の沢出合から沢を右に取ると小さなゴルジュがあり、ユギナギ跨ぎながらフリクシオンを使って通過する突破練習。そ



の上に出てくる10mほどの滝で自己確保(プルージックを利用)しながら滝を登り降りる練習などを行う。昨年の大星沢と同じく、この滝もすべてフリーで登れ、その後は各自自由登攀となって標高400m付近の林道に上がる。その林道を30分ほど戻り、砥石沢出合から途中、滑床の続く沢を降りると朝出発した橋側の駐車帯に出て終了となった。参加者9名

《8月・富良野西岳(全道交流登山会)》

8月26〜27日富良野山岳会の主管による道岳連交流登山会が富良野西岳で行われ当会から13名が参加した。交流会会場



は、北の峰スキー場ターミナル内を懇親会会場とし、キャンプサイトはスキードラ乗り場周辺に、もうけられた。翌日の登山は、当初から沢コースは荒れているとの

情報が有り、全員途中までゴンドラを利用するコースに参加。山頂付近は生憎雲が多く、十勝連山は見渡すことが出来なかったが、2日間大きく天候の崩れもなく、参加者全員一年ぶりの交流を深めた。詳細は例会で。

《例会予定》 開始時間 18:30

◆ 9月3日(日) ◆

9/16~18 東北の山登山「八甲田山」の最終打ち合わせ (※参加者締切済み)

10/8とまこまいマラソン・ボランテニア ※募集※(警備参加時間約9時~12時まで)

◆ 10月1日(日) ◆

10/21~22 記念登山会 猿留山道(※参加者募集) 詳細説明

《事業予定》

◆ 9月16日~18日 東北の山登山

「八甲田山」担当：大岡、新井孝

◆ 10月21~22日 「記念登山会」

猿留山道 担当：林会長、新井孝、新井素

◆ 11月12日 定山溪神威岳~烏帽子岳

担当：村中、小林正

《インク・ノット》

猿留山道(さるる・さんどう)は、寛政十一年(西暦1799年)に江戸幕府の公金で開削された蝦夷地最初の山道(当時の全長は約30キロメートル)の一つである。当時、ロシアが南下政策を進め、江戸幕府は、蝦夷地周辺の北方警備を強化する必要があった。そのため幕府は、急務を確実に伝えるため陸路を整備した。その一つが猿留山道である。伊能忠敬は、寛政十二年(西暦1800年)に、この猿留山道が作られた翌年に測量している。江戸時代の探検家・松浦武四郎もこの山道を歩き、多くの記述と絵図を残している。(えりも町歴史資料より)

豊似湖(とよにこ)

観音岳の山腹にある豊似湖は、馬のヒヅメの形をしておるが、あれには深いわけがある。寛政十年(1798)というから、今から二百年以上も前のことだ。近藤重蔵という偉い探検家が、千島を探検して帰る途中、この湖の上の山道を通った。そうしたら突風が吹き荒れて、家来の一人がかわいそうに馬もろとも崖から転落してしまった。そのときからだんだん湖はヒヅメの形に変わってきたんだ。周りの石にもくつきりとヒヅメの跡のついたのがある。

豊似湖は不思議な湖だ。水が増えたり減ったりするのが、潮の干満と関係があるようなもんだと。

もっと不思議なのは庶野のどんどん岩とどこかでつながっているとも伝えられていることだ。

*えりも町役場 商工観光係作成 「えりも拝見」より引用

今回の記念登山会「猿留山道」を行うに当たり、歩く「猿留山道」と山道から見られる「豊似湖」について、簡単にえりも町の資料を引用して紹介してみました。